

楽しさ世代超え 昭和レトロ堪能

産大出張講義

新潟産大の権田サミは8日、出雲崎町大門の出雲崎レトロミュージアムで出張

講義を行った。「コンテンツ産業論」を履修する3・4年生19人がオーナーの中野賢一さん(54)の話と多様な展示物に夢中になった。

出張講義は「新潟産大と柏崎信用金庫との連携協定」(2017年)に基づき、人的・物的資源の活用や地域産業の振興、人材育成を目的としており、同ミュージアムは柏崎信金出雲崎支店の取引先の一つ。

履修科目では、日本の漫画やアニメ、ゲームなどのポップカルチャーなどの歴史について学んでいる。この日は昭和のおもちゃやゲームなどに触れ、懐かしいコンテンツを生かしたビジネスの可能性を考察した。

中野さんのコレクションは約3万点。このうち約1万点を館内に展示する。「来る度に違う物を目にしてもらえよう、少しずつ入れ替えている」と中野さん。学生たちは館内を自由に見学し、レトロレオオゲムやジュークボックスで遊んだり、駄菓子を買って楽しんだりした。

3年生の今村奈津希さんは「宇宙戦艦ヤマトなど、父が好きなものばかり。入りの特撮ポスターで、この世代の男性はまず引き込まれる。館内も限られた空間をうまく使い、長時間滞在してもらえる工夫を感じた」と話した。

.....

新潟産大たちから質問を受ける中野オーナー
(左) 8日、出雲崎レトロミュージアム





3日間の集中作業の末、完成した社会課題解決アプリを発表する参加学生＝市役所多目的室

アプリで課題解決へ

日本JIC 2大学22人が集中開発

新潟産業大、新潟工科大生が3日間かけ、社会課題を解決するアプリシステムの開発に取り組んだ。日本青年会議所(日本JIC)社会グループ社会構想会議(嶋田祐介議長・嶋江JIC)の本年度事業

「ハッカソンの一環で、柏崎青年会議所(柏崎JIC、海津勇太理事長)が協力した。ハッカソン(ハック+マラソンの造語)は、主にIT業界で行われているイベント。一定期間で決めら

れたテーマに対するシステム作りを行う。同会議は同事業を全国10カ所で開催し、柏崎が4カ所目。22人の参加は過去最大規模となった。マサチューセッツ工科大の開発ツール「アップインベーター」を使用し、デジタル人材の育成も目的。完成したアプリは、行政や民間で実用化の可能性も秘める。

学生は5グループに分かれ、初日の5日は市村が抱える社会問題をフィールドワークで抽出・ヒアリング。2日目にワークショップとアプリ開発に着手した。中間発表ではアドバイサーから厳しい意見が飛び交ったが、学生たちは奮起し、深夜まで開発やプレゼン準備を続けた。

最終日の成果発表で各グループは、問題分析やアプリの使用方法も含めて提案した。最優秀賞は小山流輝さん(工科大修士1年)、加藤優仁さん(工科大4年)、佐藤風紗さん(産大4年)、掛川航季さん(同2年)の「Yes! Farmatch」。農繁期の人手不足に学生短期バイトを募集。学生にとっても就業経験が採用時に有利となり、また県内農業系学校

の学生を柏崎刈羽と結びつける役割も担えるとした。佐藤さんは「他大生と一緒だったことは普段と違う視点が得られ、解決へのアプローチが多様化できた。相手に売り込むプレゼンも初体験。つらかったけど泥臭く頑張れた」とホッとした表情。開発担当の小山さんは「タイトなスケジュールに、システムエラーも頻発した。実際に使いたいと思ってもらえるか、今までに経験したことがない視点で取り組めた」と糧にした。

講評で嶋田議長は「課題をもっと掘り下げると、本当の策が見いだせる」と激励した。嶋田議長(38)は「一人ではできない大きなことも、仲間と取り組むことで可能になる。大人も言え、今回できたつながりを将来の好機にしてほしい」と伝えた。

開催に尽力した同会議委員で、前柏崎JIC理事長の平川尚さん(37)は「モチベーションの高い学生が集まってくれ、期待を上回る成果を上げてくれた」と言い、「この先も柏崎JICがハブとなり、行政や2大学とさまざまな事業を構築

創造していければいい」と話した。

とさまざまな事業を構築

大産新 2学科6コースに改編 「柏刈地域特待」を新設

新潟県大は2025年4月からの学科6コース制に改編する。さらに新たな3つの特待制度(学費減免制度)を設ける。コース制の導入は卒業時に獲得すべき技術・能力を見据えたカリキュラム体系を備えた。

導入するコースは、経済経営学科(募集定員80人)が「経済分析・未来予測」「企業経営・情報戦略」「企業会計・金融制度」の3コース。文化経済学科(同60人)は「文化産業・国際理解」「持続可能な地域づくり」「スポーツ・健康経営」の3コース。

新設する特待制度は「柏崎・刈羽地域特待」「地域活動特待」のほか、地方公務員や地方中核企業で地域のリーダーを目指す「アドバンス特待制度」の3つ。

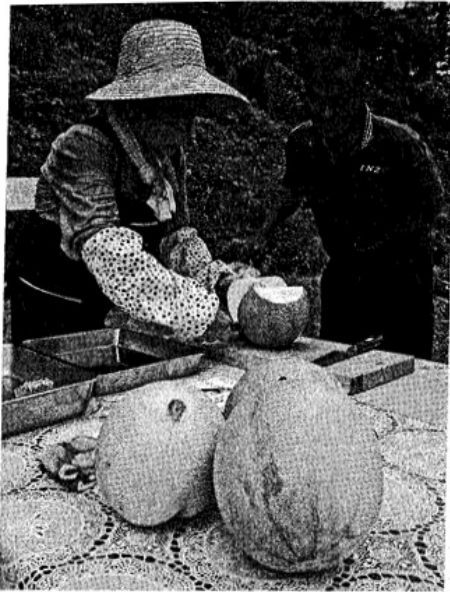
「柏崎・刈羽地域特待」の対象は市内高校の在学者または柏崎市・刈羽村在住者。「地域活動特待」は地域活動を実施する高校(同

大指定)の在学者または総合的な探究の時間等で地域活動を行っていること。どちらも全ての入試区分に適用し、人数制限はなく、入学金(21万円)が全額免除

になる。
一方、初年次授業料(66万円)が半額免除になる「アドバンス特待」は評定平均3・4以上で入学後は原則として経済分析・未来予測コースを履修する。募集は10人程度。
また同大には、経済的な事由により就学が困難な

学者を対象に、返済義務のない給付型奨学金「シン・スリープル」があり、年間30万円を原則4年間給付する。申請条件は世帯収入が給与所得のみの場合は年間収入額650万円未満、給与所得以外のみの場合は年間所得額400万円未満など。

山中産メロン 品質上々 高柳 27日から恒例直売も



市内高柳町山中で栽培されたメロンの直売に向け、会員が集まって品質を確認した試し切り＝20日、同所

市内高柳町山中で地元住民らが栽培しているメロンが収穫期に入った。今年も「山中産のメロンを多くの人に味わってほしい」と、27日から直売所を開設する。直売に先駆け、20日は会員が集まり、今年の品質を確認した。

メロン栽培の発起人は、山中出身の小沼常之さん（71）＝魚沼市＝。知り合いの農家に栽培を勧められ、「ふるさとで挑戦したい」と約10年前から取り組んでいる。当初は思うように実が育たず苦戦したが、栽培場所を変えたり、生育に適した土に改良したりするなど試行錯誤を重ね、次第に実るようになってきたという。

4月末に「優香」「オルフェ」「タカミレッド」の3品種の苗を植えた。その後も各自が定期的に畑に顔を出し、生育を見守ってきた。20日に行われた「試し切り」には会員約20人が訪れ、メロンの甘さを糖度計で調べた。早生（わせ）品種の優香はちょうど食べ頃で糖度は14度ほどに。試食した人たちは「甘い」などと満足の表情を見せた。

今春からじよんのび村協会に入社した奥野飛龍さん（24）も栽培に挑戦。「先輩方からアドバイスをもらいたくさん実践してくれた。試行錯誤しながら育っていく過程を見るのも楽しい」と笑みを見せた。小沼さんは「雨が続いた影響で生育が心配だったが、例年並みの収穫も見込めそう。丹精

込めて育てたメロンを味わってもらいたい」とPRした。27・28日の直売では優香を中心に販売。8月は3・4・11・12日その他の品種も販売する。なぐり次第終了。直売所は国道252号沿いの月湯女荘跡地（高柳町山中1016-5）。時間は午前8時～午後5時を予定している。

水球のまちの 出前授業に歓声

フルボンKZ
柏刈10校で

市内を拠点とする水球の「フルボンウォーターポロクラブ柏崎」(フルボンKZ)の出前授業が18日まで、柏崎刈羽の小学校10校で行われ、水球の楽しさを教えた。子どもたちは社会人、大学生の男女所属選手から泳ぎの基礎を学んだほか、ボールを使って交流するなどボールに歓声が響いた。出前授業は水球の普及を目的に、2012年からスタート。児童数や学年ごとに内容も変え、水上競技の楽しさを伝えている。17日

午後、米田航選手(32)、長谷川陽子選手(33)、長谷川雛子選手(27)と、新潟県大3年の高田いづみ選手、同1年の池田陽輝選手の5人が半田小を訪問した。

ゴールが設置されたプールでは、6年生55人が4チーム、2コートに分かれてゲーム開始。お互いに人数を増やしながら攻め込み、シュートが決まると歓声と笑顔に包まれた。

上村来暉君は「水中は動きにくいから、シュートも難しい。去年までと違って今日は最初から試合形式で楽しかった」、田辺ななみ

フルボンKZの出前授業で水球を楽しむ児童17日、半田小



さんは「選手はみんな格好良かった。水球の試合は見

たことがなかったけど、バ
リ五輪が気になってきた」

と声を弾ませた。

米田選手は「まずは子どもたちに水球を知ってもらい、これをきっかけにスポーツの楽しさを感じてもらいたい。さらに、この先に控える五輪や柏崎での日本選手権(10月)で、チームを応援してくれたらうれしい」と期待を込めた。

熱気と興奮 パワー全開

「たる仁和賀」威勢よく

ぎおん柏崎まつり

ぎおん柏崎まつりのたる仁和賀パレードが25日夜、市中で繰り広げられた。町



内会や団体、グループなど36団体から約2300人、山車、仁和賀、みこしなど55台が参加した。昼間の暑さが夜まで続々中で市民のパワーを全開させた。26日は越後三ツ花火の一つ、海の大花火大会、日本海の夜空を焦がし、今年のまつりを締めくくる。

パレード開始を前に、まつり実行委員会の西川正男・柏崎商工会議所会頭が「今年も柏崎に熱い夏がやってくる。新型コロナウィルスの影響で参加を見合わせていた皆様がこの会場に戻ってきたり、今年初めて参加する人も多かったりすると嬉しい。準備や練習に打ち込んだ成果を存分に発揮してほしい。皆さんの元気と熱気で柏崎を盛り上げていこう」と宣言した。夕暮れとともに、いなせな法被、はんてんにハッチ市民の心意気をアピールした「たる仁和賀」。威勢の良いもみ合いで楽しませた。25日夜、市内東本町1



大人に交じって、子どもたちも大活躍。元気をアピールした＝25日夜、市内東本町1

漆の参加者たちが「セイヤ」「セイヤ」のかけ声で爽快なもみ合いを繰り広げた。元気がつぱいのパフォーマンスを披露。勇壮な仁和賀に交じり、話題の野球選手・大谷翔平を模したのや、ミッキーマウスなどを題材にした山車が見物人を楽しませた。

一番手で実行委員会本部前で爽快なもみ合いを繰り広げた荒浜町内会は意気揚々、品田善司・同地区コミセン会長(70)は「みんなの元気な声が出て、一番にふさわしいみこしだった」と笑顔。穂波町内会には精巧な「那須与一」の山車を繰り出した。6月初めから製作に取りかかり、青年会長の植木健弘さん(47)は「疫病退散、商売繁盛の思いを込めた」とマシジョン

6年・年代絵巻さん、東中1年・山田結愛さん、同・村山仁壽さんは「沿道の人から応援してもらえて良かった」「楽しく踊っているところを見てもらいたい」と大張り切り。みこしをかついだ柏工2年・山田愛翔君、柏工3年・後藤慶次郎君は「みこしは重かったけれど、気合と根性、友情で協力して乗り越えた」と満足。松波町内会では、さらしをやりとりしていた松浜中3年・朝賀陽向さんが「町内の団結をアピールした」、のほりを持つた同1年・柴野海翔君が「松波のプライドを持って力いっぱい歩いていく」と先頭に立った。

5年ぶりに参加した柏崎青年工業クラブの威勢の良さは指折り。吉田真大会長(43)は「柏崎の工業界をどんと盛りあげ、もともつと元気になればいい。若者の力を柏崎のために発揮していきたい」と言い、みこしの上からおおいだ。陣大のみこしで、サッカー部の1年・齋木輝音さんは「松波地区の出身だが、みこしに出たのは初めて。みんなが柏崎を盛り上げた」と大声援。工科大のみこしでは、4年・片桐謙那さんが隊列の先頭に立った。「今までは地元の色角九区で参加していた、大学では初めて、友だちとやれたい」と卒業前の思いを出をつくった。上田県有志会がハフオーマンスを披露した田尻小

スマホで撮影していたミヤンマー人のナンゴ・ハンさん(24)、ニ・ルイさん(30)は市内のグループホームの介護士。「いろいろな衣装があつて興味深い」「楽しそうなので、自分も参加したい」と初めての祭り自物の感想。「ふるさとに家族に日本の文化を伝えてあげたい」としきりにシャッターを押し続けた。

市民パワーで 心意気燃え



新潟産業大学

パリ五輪水球男子

日本強豪セルビアに惜敗

PVで柏崎選手にエール

パリ五輪に出場しているアルボンウォーターボロククラブ柏崎（アルボンKZ）3選手を擁する水球男子日本代表は28日、1次リーグ初戦で五輪2連覇中のセルビアと対戦した。日本は強豪相手に最後まで互角の展開を見せたが、土壇場で15-16で競り負けた。市内西本町3の市民活動センター「まちから」では、クラブ関係者約180人が「パリ五輪応援会」を開催し、選手を応援した。試合には、アルボンKZの稲場選手が得点。日本は第2Pで初めてリードを奪った。前半は8-7で折り返した。

新田一景（26、稲場悠介）の3選手が代表入り。日本は第1P（P）で立て続けに2失点したが、すさまじくアルボンKZの稲場選手が得点。日本は第2Pで初めてリードを奪った。前半は8-7で折り返した。

第3Pは4連続失点を許して一時は最大3点差が開いたが、稲場選手がペナルティシュートを決めるなど反撃。最終第4Pには稲場選手がこの試合6回目で15-15と同点したが、最後は相手に決勝点を決められた。

アルボンKZの選手らを応援しようと、PVが行われた「まちから」にはクラブ所属の選手などが試合の行方を観戦した。日本が得点を決めたり、GKが好セーブを見せたりすると、訪れた人たちはアルボンKZのチームカラーの青と赤のスティックバルーンをたいて応援を送った。

第4Pで稲場選手が二度にわたって同点シュートを奪うと、ひときり大きな歓声が上がり、会場のボルテージは最高潮に。強豪セルビアに1点差で敗れたが、試合が終わると健闘をたたえる拍手が湧いた。

稲場選手の兄で、アルボンKZ元選手・英行さん（36）は「弟が出れば勝っていたかもしれない」と悔しさをあらわにし、「柏崎勢が世界で活躍していくにはこの大舞台で個々の実力を見せつけることが必要。また選手は続くので、力を尽くしてほしい」と期待を込めた。

PVは8月3日午後5時半から、1次リーグのスペイン戦でも行われる予定。会場はまちから。



パリ五輪に出場する水球男子日本代表へ応援を送った「パリ五輪応援会」のメンバーたち。28日、市内西本町3の「まちから」。

酷暑の事故警戒 「安全運転を」

フルボンクZ協力
街頭指導所や立哨

夏の交通事故防止運動（22、31日）中の23日、柏崎署と市、柏崎地区交通安全協会は市内西港町の臨港道

路・みなまち海浜公園付近に街頭指導所を設置した。海岸線を走るドライブバーに安全運転を呼び掛けた。指導所には、フルボンクZのドライバーが立哨し、ドライバーに「安全運転をお願いします」と呼び掛けた。また、水球競技の応援に控え、「水球競技の応援をお願いします」とPRも欠かさなかった。梅村選手は「ぬれた路面に反射したライトや、朝夕のまぶしい日差しなど、運転しづらい場面は多くある。みんなで気をつけていきたい」と話した。

夏の内は、海水浴やきおん柏崎まつりなど、さまざまな地域から車両がやってくる時期。高橋益英交通課長は「レジャーの行き帰りにや酷暑などで過労運転になりやすく、過度な休憩を。また酒がおいしい季節だが、飲酒運転は絶対にしないでほしい」と呼び掛けた。

は、地区安協枇杷島地区（大沢圭司地区長）の立哨が国道8号の枇杷島、宝町各交差点、353号と8号バイパスが交わる城東交差点の3カ所で行われた。このうち、城東交差点では、8人が「交通安全」「全席シートベルト」などののぼり旗を掲げ、通勤ドライバーらに安全運転を啓発。大沢地区長（71）は「種波町や田中方面からバイパスへ

つながる道路は、信号機のない交差点が続く。急ぐ気持ちに分かるが、しっかりと一時停止し、事故のないよう通行してほしい」と呼び掛けた。23日現在、管内の交通人身事故は28件（前年比13件減）、死者1人（1人減）、負傷者30人（14人減）。



海岸線を走る車両に安全運転を呼び掛けるフルボンクZの選手ら。市内西港町



通勤車両などに安全運転を呼び掛ける地区安協枇杷島地区。市内城東1

「新潟大学学生」 地域に学び 地域をふさぐ

— 実践活動レポート —

ゴルフ初体験

近年、スポーツツーリズムによる観光等、スポーツにおける地域活性化が注目されている。柏崎市も例外ではない。

私自身は上達しないゴルフを少ししなんでいる。そこで、地域理解セミナー（スポーツ分野）で柏崎のゴルフ場、練習場をフィールドワークし、学生はグループワークを通じ、地域の課題解決の一つとして検討することを試みた。学生がゴ

ルフをする機会は少なく、今までかかわったことのない新鮮な感覚が重要だと考えている。

6月13日には柏崎シーサイドゴルフクラブを訪問した。当日は秋山錦也氏（アールケーイー取締役）にレクチャーしていただいた。

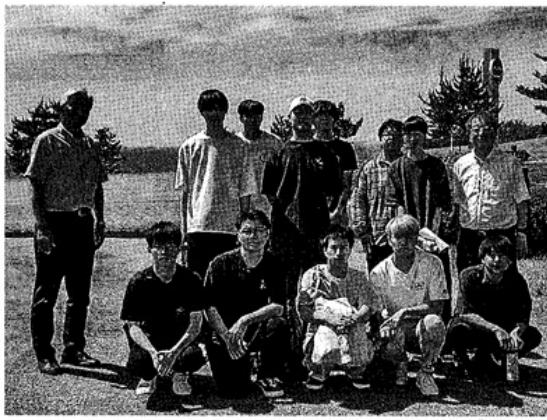
同20日には柏崎ベストゴルフ練習場を訪問した。当日は北村和秋氏（善取締役社長）との都合がつかず、話は聞けなかったが、練習場をお借りして、学生に打球練習を

し、ゴルフの楽しさを体験してもらった。

同27日には柏崎カントリークラブを訪問した。当日は藤野順次氏（高浜観光開発代表取締役社長）にレクチャーをいた

だいた。

私市憲彦さん（経済経営学科3年）は「なかなか聞く機会がないゴルフクラブの運営について実際に運営している人から直接聞くことができ、ゴ



ルフクラブの雰囲気などを実際に行って感じることもできたのも良かったこと感想を述べている。

原千力発電所の関係者の減少、中越地震、中越沖地震での被害、新型コロナウイルスの流行などいくつもの困難を乗り越え、ゴルフ場、練習場は現在も経営を続けている。

ゴルフ愛好家が団塊の世代に多いこともあり、ゴルフ人口は減少しているという。若者や女性のゴルフ参加を期待しつつ、インバウンドにも焦点を当て、どのように集客を高めていくかが今後の課題である。

二 経済学部講師・小黒裕

一 （同大学地域連携センタ